2023年6月11日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

広い心で主を信じる

［ローマの信徒への手紙11章25～36節］

兄弟たち、自分を賢い者とうぬぼれないように、次のような秘められた計画をぜひ知ってもらいたい。すなわち、一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人全体が救いに達するまでであり、こうして全イスラエルが救われるということです。次のように書いてあるとおりです。「救う方がシオンから来て、ヤコブから不信心を遠ざける。これこそ、わたしが、彼らの罪を取り除くときに、彼らと結ぶわたしの契約である。」

福音について言えば、イスラエル人は、あなたがたのために神に敵対していますが、神の選びについて言えば、先祖たちのお陰で神に愛されています。神の賜物と招きとは取り消されないものなのです。あなたがたは、かつては神に不従順でしたが、今は彼らの不従順によって憐れみを受けています。それと同じように、彼らも、今はあなたがたが受けた憐れみによって不従順になっていますが、それは、彼ら自身も今憐れみを受けるためなのです。神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです。ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。「いったいだれが主の心を知っていたであろうか。だれが主の相談相手であっただろうか。だれがまず主に与えて、その報いを受けるであろうか。」すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。

[1] 異邦人とユダヤ人からなるローマの教会に宛てて

「ローマの信徒への手紙」を、「聖書教育」の箇所に従って読んでいますけれども、今日は11章に入っています。この「ローマの信徒への手紙」は章の数で言うと全部で16章ありますが、その頂点（クライマックス）は、丁度真ん中辺りの8章だと言われています。「いかなるものも、わたしたちをキリスト・イエスの愛から引き離すものは何もない！」と、使徒パウロはキリストの愛に圧倒されながら、その福音の恵みを、出来上がったばかりのまだ見ぬローマの教会の人々に励ましを持って書いているのです。そしてパウロは、9章から11章まではイスラエルの民・ユダヤ人と福音との関係を、自分もユダヤ人でしたから自らの痛みとして捉え、神様のご計画の深さ、大きさをどうしても語っておかねばならないと思って記したのだと思います。おそらくローマの教会というのは、その土地のギリシア人（つまり異邦人）たちも当然いましたし、またユダヤ教の中からイエス様の福音を聞きキリスト者になったユダヤ人たちも一緒にいる、そのような教会であったと言われます。つまり新しい時代が始まっているのです。今でこそキリスト教信仰を持つ者は全世界におりますが、そのためには、当時、ユダヤ教が抱いていた「ユダヤ主義」といったものからの脱皮が必要ですよね。そうでないと、異邦人とユダヤ人は、水と油の様な、反発し合ってしまう関係のままになってしまいます。そのために、神様は、パウロという人物をお用いになったのだと思います。熱心なユダヤ教徒であり、律法主義者であったパウロ自身が、主イエスと出会ってその生き方がひっくり返されたということが、民族主義を超える「福音」の使者として大きな説得力を持っていたと思います。

[2] 単なる 「愛国」を超えさせるもの

その意味では、彼の変えられた存在自身が神様の恵みの証しなのですけれども、彼は何とか言葉をも尽くそうとしています。それは、これから他民族と共に生きていく「教会」は何に根ざして行かねばならないかということを語っているのです。先週私たちは10章の中から読みましたが、そこで既にパウロは、神様の救いを頂くのに、ユダヤ人も異邦人も違いはないということを明確に語っていました。10:12～13です。「ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです。」 そして、主はすべての人に恵みを注ぐとあるけれども、それには実は順序があったということを語るのです。初めは神様は、イスラエル・ユダヤ人たちと契約を結ばれたと。ユダヤ人たちから救いの業を始めたかった。しかし事もあろうに、ユダヤ人たちの方からその神様との関係を切り捨ててしまった。けれども驚くべきことに、神様はそのユダヤ人たちの罪や過ちを用いられて、「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」という、ただ主を心から呼べば救われるという、異邦人にも開かれる、「律法の行い」ではなく、「信仰」による救いの道をお作りになったというのです。

パウロは11:12でこのように言っています。―「彼らの罪が世の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのであれば、まして彼らが皆救いにあずかるとすれば、どんなにかすばらしいことでしょう。」―逆転とも言える、イスラエルの罪がむしろすべての人の救いに繋がっていく、これは不思議な神様のみわざです。11章で、パウロは異邦人キリスト者（ローマ教会員）に「誇ってはなりません」（18節）とか「思い上がってはなりません」（20節）とか「うぬぼれないように」（25節）という言葉を使っています。あなた方も神様の愛と憐みの故に今があるのだよと。29節ではユダヤ人に対する神の契約のことについて、「神の賜物と招きとは取り消されないものなのです」と言っています。どういうことかな？と考えたのですが、神様の救いへの決意は人間の不従順や罪によって消えてしまうほど貧弱なものではないということではないでしょうか。おかしな言い方ですが、もしも神様がユダヤ人の過ちの故に心折れて（⁉）諦めてしまったら、神様はイエス様を地上には送られなかったでしょう。あのクリスマスの出来事は、神様の人類愛の決定的証しです。神様の本気の覚悟です。それを無にしてはいけません。

パウロは、「わたしは異邦人のための使徒であり、その務めを光栄に思います」（13節）と言っています。そして異邦人に福音が及ぶようになったのは、ユダヤ人の罪・頑なさがあったので、そのユダヤ人にねたみ（奮起）を起こさせるためなのだと語っています。本当に不思議な神様のご計画なのですが、私はそのことをパウロが言っているということが凄いことだと思いました。と言うのは、パウロは生粋のユダヤ人なのですよ。神様に対する自国イスラエルの民の過ち（それは自らも含めてです）をまず認めているのです。とんでもないことをしたと。もし彼がいわゆる単なる「愛国者」であったのなら、見たくない過ちの歴史には向い合わなかったのではないでしょうか？しかし彼は狭い「愛国心」から解放され、広い心を与えられたのです。彼はクリスチャンたちを殺そうとさえしていた人物でしたが（今の言葉で言えば宗教的テロリストです）、主イエスは彼を赦し、そして神に赦された者として用いられ、福音伝道者となっているのです。神は、私の罪も不従順もイスラエルの不従順も、よ～く知っていて下さっている。いかに自分が情けない人間であるか誰よりも知って下さっている。でも主は私を捨てない、あなたを捨てることもない。そして、神様の方法で私たちを主のわざに用いて下さる。32節でパウロは言っています。―「神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです。」 あるのは、主の憐みです。

[3] 「雑草と言う草はない」 という主のメッセージ

今日の箇所の少し前なのですが、パウロは異邦人クリスチャンのことを、「野生のオリーブの木」だった存在と言っています（17節）。それが、根っこが聖なるものとされている「栽培されているオリーブの木」に接ぎ木されたのだと。キリスト者とされたとはそのようなことだと語っているのです。言い換えれば、神様のご計画に繋がる、巻き込まれるということですね。“神様の深いご計画の中に巻き込まれる”―今を生きる私たちもまた、そのことを喜びと出来るかどうかだと思います。

NHKテレビの朝の連続ドラマ小説で、植物学者・牧野富太郎博士の半生を描いている『らんまん』 をちょっと見ていましたら、少し前にこんな印象深い言葉を万太郎（のちの富太郎）が語っていたのを観ました。倉木という飲んだくれの人物が万太郎にボソリとこぼすのです。―「雑草なんか生えててもしょうがねえだろうが」。この言葉は戊辰戦争でも辛い経験をし、その後、悪さもし、俺なんか居ない方がよいという絶望的な嘆きだったのですね。これに対して万太郎（神木隆之介）は熱く語るのです。***「雑草という草はない。必ず名がある！天から与えられ、持って生まれた唯一無二の名があるはずじゃ。その名をまだ見つかってない草花ならわしが名付ける。わしは信じとる。どの草花にも必ずそこで生きる理由がある。この世に咲く意味がある。必ず！」。***

これは素晴らしい言葉だと思いました。まるで神様が聖書を通して私たちに語ってくれている言葉のように響いてきました。神様はどの草花も隔てなく愛されている。この万太郎は、ドクダミの葉も愛するのです。私は知ったのですが、ドクダミというのはよく日陰に生えるのですが、毒消しの役割もする薬草にもなるのだそうです。そして、万太郎は本当に草花を慈しんで、道端にしゃがみこんではその草花の名を呼んで話しかけるのです。ああ、イエス様もそのように私たちに語り掛けて下さっているのではないかなと思います。神様の思いとは、私たち全ての者の救いです。「雑草という草はない」のです。異邦人とかユダヤ人とかない。誰一人捨てられることを主は望まれないのです。そのために主は十字架で私たちへの究極の愛を示して下さったのですよね。26節に「救う方がシオンから来て」とありますけれども、パウロはイエス様のことを言っています。主が愛をもって私たちを捉えて下さっているので、私たちはこの人生、自分自身にこだわる生き方から、神様が開いて下さる世界の中に、上からの光を受けながら生きることが出来るように導いて下さっているのではないでしょうか？私たちは、主が命を捧げられたほどに神様に重んじられている存在です。パウロが変えられたように、私たちも聖霊によって導かれながら、広い心をもって歩んでゆきたいと思います。お祈り致します。

主なる神様、あなたの救いのご計画は図り知ることは出来ません。しかし、永遠なる存在のあなたが、こんなにちっぽけで過ちだらけの私たちにありたっけの愛を注いで下さっていることを感謝致します。どうぞ、目先のことに右往左往してしまう者ですが、あなたの私たちに対するご計画は不動であることを固く信じさせてください。そして、聖霊によって導かれる人生を感謝と喜びをもって生きていくことが出来ますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。